

朝日町内を離れ、現住所(注:南町)に住むようになって14年目を迎える。まさに水の流れのごとく歳月の早さを感じずにはいられない。

現在、常呂遺跡の発掘の場となっている所が以前の朝日町内である。役場から見ると川向かいにある戸数40戸ほどの小さな区でした。

私が朝日区の住人になったのは昭和22年、当年とってわずか17歳の世間の甘苦を知らない若造で、阿部左官に弟子入りのした。

その頃の朝日区は戸数2・3戸しかなく、あのいまわしい大東亜戦争の食糧難の時で、自家食糧生産の畑だった。

戦後、1戸、また1戸と家が建ち、昭和25年から26年にかけて急激に戸数が増加しました。当時は弁天区でしたが、戸数の増加によって分離し、朝日の昇る東部であることから朝日町と名づけられた。(注:昭和28年4月10日 朝日町内会設立祝賀会/可児宅 「当直日誌」)

朝日町の名づけ親は、元町議会議員の故高橋平次郎さんであったと先輩より聞いている。(略)

当時の風物詩は、2月の厳寒に常呂川に張り詰めた氷を切り、幾頭もの馬がシャンシャンと鈴を鳴らし、搬出する賑やかなものだった。

氷切りに使う鋸は、一風変わったバラ目の大きな広幅鋸で、氷を切る「シャシャシャッ、シャシャシャッ」という音は、不思議な響きでした。

その頃の常呂川は、底の底まで透き通って見えるほどきれいな川でした。

川の水は1メートル流れると元の水になる、そんな訳でもなかったろうが、本通りの川端付近の家々は、お米を研ぐのも洗濯をするのも川を利用していた。

そんなきれいな水でしたから、川から切り出した氷が漁協の氷倉に保存され、夏場の漁期に使われたのだろう。

弁天・朝日地区に暮らす人々は、そんな風景を横に見ながら厚く張った氷の上を渡り、街に用足しをする。常呂橋を渡るより十分の一も近道になるこの「氷の橋」は、12月上旬からお彼岸の頃まで便利に利用され、子どもたちの通学路にもなっていた。それもまた風物詩といえるだろう。

末広地区と朝日地区を結び吊り橋(注:朝日橋 昭和39年12月26日完成、渡橋式)ができてから氷の橋を渡る人影はなくなり、時の流れとともに昔の風物も消えていった。(略)